

「聞く耳、語る言葉」

2014年09月10日

マルコによる福音書7章31節～37節。それからまた、イエスはティルスの方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッフアタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

主イエスは、異教のティルスを去り、ガリラヤに戻られた。すると、人々は聾啞者と思える人を連れてきて、いやしを懇願した。主イエスは、彼を連れ出し、指を両耳に差し入れ、唾をつけて舌に触れ、そして、天を仰ぎ、深く息をつき「エッフアタ（開け）」とアラム語で言われた。すると、耳が開き、言葉を話せるようになった。いやされた彼はどんなに喜んだらうか。群衆は「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる」と驚嘆した。この時、主イエスはまたも、いやしの奇跡を口止めされた。しかし、口止めされればされるほど、人々は主イエスの素晴らしい業を言い広めた。

この奇跡は歴史的にはどのような出来事であったのであろうか。私たちには分からない。マルコ福音書の著者は、読者の「なぜ、どうして」という疑問を全く無視するかのようになり、主イエスのいやしの奇跡を直截に伝えている。もちろん、キリスト告白の視点からの記述であるが、奇跡物語は人間の深い宗教的実存を述べているのではないか。

エルサレム神殿の祭司ザカリアは、息子の洗礼者ヨハネの誕生を告げられるが、老人夫婦にはあり得ないと思ひ、信じることができなかつた。そのために、彼はヨハネが生まれるまで口が利けなくなつた。不信の者は言葉を失うと書いてある。ヨハネ福音書9章には、生まれつき目の見えない人が、主イエスによって見えるようになった奇跡を記している。ファリサイ派の人々との最後の論争において「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」、また「見えなかつたのであれば、罪はなかつたであらう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」と言っておられる。

見る、聞く、語るは身体的なことだけでなく、事の本質を見、聞き、真実を語る言葉を持つという宗教的真理を含んでいる。今日、過剰な見聞と言葉の氾濫に惑わされ、真偽がつかめない。聖書における「真」とは神を信じ、互いの命を守り合うことである。「偽」とは神を否定し、隣人を傷つけ、自分と仲間の利益のみに走ることである。主イエスのいやしの奇跡に与る時、真偽を見極める目と耳と言葉を回復させてくださる。この奇跡が私にも起こる。それを求め、願って生きることが信仰生活である。